NEW JAPAN PHILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2023/2024シーズン

2023

9

September

2023/2024 シーズン
新日本フィルハーモニー交響楽団 9月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ／サントリーホール・シリーズ #651　久石 譲、相場ひろ　1

すみだクラシックへの扉 #17　小室敬幸　9

楽員ストーリーズ 36　佐々木絵理子（第2ヴァイオリン・フォアシュピーラー）　15

NJP from Inside　16

NJP 10月、11月公演　柴田克彦の鑑賞ポイント　20

2023 / 2024シーズン　定期演奏会プログラム　22

室内楽シリーズ　26

「パトロネージュ・システム」のご案内　34

delete C　新日本フィルハーモニー交響楽団は、#deleteC大作戦の啓発パートナーです。

本プログラム冊子は、「deleteC」（みんなの力で、がんを治せる病気にするプロジェクト）に賛同し、新日本フィルのロゴの「C」を消す表現をしております。
「deleteC」については、P. 29をご覧ください。

〈コンサートの感想をお寄せください〉

演奏会終了後１週間以内にご回答いただいた方の中から、抽選で10名様に新日本フィルオリジナルグッズをプレゼント！

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。プレゼントの当選者にはメールにてご連絡させていただきます。culture@njp.or.jpからのメールが受信できるようご設定をお願い致します。

https://forms.gle/nzYkJLAuZG1tfYY36

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。

■特別支援企業

オリックス
鹿島
CCC
大和証券
東京東信用金庫
NOMURA
フジサンケイグループ
三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業／団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

〈ご来場のお客様へのお願い〉

Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2023-2024 Season
#651

9.9［土］ トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第651回定期演奏会
2023年9月9日(土) 14時00分
すみだトリフォニーホール

9.11［月］ サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第651回定期演奏会
2023年9月11日(月) 19時00分
サントリーホール

◉久石 譲（1950－）

Adagio for 2 Harps and Strings　新日本フィル委嘱作品［世界初演］　約15分
Joe Hisaishi: Adagio for 2 Harps and Strings　Commissioned by NJP［World Premiere］

―― 休憩20分 ――

◉マーラー（1860－1911）

交響曲第5番 嬰ハ短調　約75分
Gustav Mahler: Symphony No. 5 in C-sharp minor

Ⅰ. 葬送行進曲：精確な歩みで。厳粛に。葬列のように
Trauermarsch: In gemessenem Schritt. Streng. Wie ein Kondukt

Ⅱ. 嵐のように激しく動いて。最大の激烈さをもって
Stürmisch bewegt. Mit grösster Vehemenz

Ⅲ. スケルツォ：力強く、急ぎ過ぎずに
Scherzo: Kräftig, nicht zu schnell

Ⅳ. アダージェット：きわめてゆっくりと
Adagietto: Sehr langsam

Ⅴ. ロンド・フィナーレ：アレグロ―アレグロ・ジョコーソ。生き生きと
Rondo-Finale: Allegro – Allegro giocoso. Frisch

［指揮］久石 譲
Joe Hisaishi, Conductor

［コンサートマスター］西江辰郎
Tatsuo Nishie, Concertmaster

［アシスタント・コンサートマスター］立上 舞
Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
■共催：すみだトリフォニーホール［9/9公演］
■特別協賛：オリックス株式会社／公益財団法人オリックス宮内財団
■助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（創造団体支援））
独立行政法人日本芸術文化振興会
公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション
一般社団法人 授業目的公衆送信補償金等管理協会（SARTRAS）

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団
文化庁
Rohm Music Foundation
ローム ミュージック ファンデーション
共通目的事業・助成事業
SARTRAS

Profile

©Omar Cruz

久石 譲［指揮］ Joe Hisaishi, Conductor

国立音楽大学在学中よりミニマル・ミュージックに興味を持ち、現代音楽の作曲家として出発。1981年『MKWAJU』を発表、翌年に1stアルバム『INFORMATION』を発表し、ソロアーティストとして活動を開始。84年の映画『風の谷のナウシカ』以降、宮崎駿監督作品の音楽を担当するほか、『HANA-BI』『おくりびと』『悪人』『かぐや姫の物語』『家族はつらいよ』など、話題作の映画音楽を多数手掛け、日本アカデミー賞最優秀音楽賞、2009年紫綬褒章受章など数々の賞に輝く。演奏活動においては、04年7月、「新日本フィル・ワールド・ドリーム・オーケストラ（W.D.O.）」の音楽監督に就任。また2017年から「Joe Hisaishi Symphonic Concert: Music from the Studio Ghibli Films of Hayao Miyazaki」の世界ツアーをスタートし、パリ、メルボルン、ロサンゼルス、ニューヨーク、プラハ等で開催し、大成功を収める。近年は「交響曲第2番」や「Metaphysica（交響曲第3番）」などの作品発表にも意欲的。海外では香港フィル、ロンドン響、メルボルン響、アメリカ響、シンガポール響などの指揮を執る。14年より、世界の最先端の“現代の音楽”を紹介するコンサート・シリーズ「MUSIC FUTURE」を始動。19年7月、新プロジェクトとして「フューチャー・オーケストラ・クラシックス（FOC）」をスタートさせ、同年「久石譲 ベートーヴェン：交響曲全集」をリリースし、第57回レコード・アカデミー賞特別部門特別賞を受賞。国立音楽大学招聘教授。20年9月に新日本フィルハーモニー交響楽団Music Partnerに就任。21年4月から日本センチュリー交響楽団首席客演指揮者に就任。

Program Notes

■ 久石 譲：Adagio for 2 Harps and Strings

2023年新日本フィルハーモニー交響楽団からの委嘱で、9月9日トリフォニーホール、11日サントリーホールの第651回定期演奏会のために作曲した。

自らマーラーの交響曲第5番を指揮するのでその前に演奏することになる。マーラーの楽曲は全5楽章からなり、約1時間10分を要する大曲である。第4楽章のアダージェットが映画『ベニスに死す』などにも使われとても有名で、マーラーの交響曲の中でも最も人気が高い作品である。

当然僕としてはそれを意識した上で2023年7月末から作曲を開始した。7月はワシントン・ナショナル交響楽団を含む3つのオーケストラですべて異なるプログラムを行った直後なので、かなり疲れたため困難な状況だったが、東京から離れた仕事場で8月10日までに大方の作曲を終了し、東京で仕上げに取り組み8月15日に完成した。異例の速さだったが、これはとても幸運だったとしか言いようがない。

漠然と「マーラー“アダージェット”の久石版が書ければ」と考えていたのだが、詰まるところは遅いテンポの楽曲を書きたかったということである。

ミニマル系の作曲ではリズムがメインになるのでスローな曲は得意ではない。特にアメリカ系のミニマル作品には少ない。僕の作品でも遅い楽曲はあまり多くないので、今回チャレンジしようと考えた。また、マーラーの楽曲と一緒に演奏するのはそれなりのプレッシャーがかかるのだが、幸い上記のスケジュールをひたすらこなして目の前のことに集中したため、順調に仕上がったわけである。

だが、完成したスコアを見るとかなり細かい音符もあり演奏は決して楽ではない。

編成は2ハープとストリングスでほぼマーラーの“アダージェット”と同じで（ハープが1台僕の曲では多い）約12分半の長さになった。出だしのハープの音形は半音高いが、マーラーからの引用で、もちろん敬意を込めての使用である。

論理的に構成しているつもりであるが、結果として大らかな自然と人への讃歌であり、祈りでもあれば、と願っている。

2023年8月

久石 譲

［楽器編成］ハープ2、弦楽5部。

Program Notes ◉相場ひろ［音楽評論］

1971年に公開されたルキノ・ヴィンスコンティ監督の映画『ベニスに死す』で印象的な用いられ方をしたことで、グスタフ・マーラー（1860~1911）の交響曲第5番第4楽章「アダージェット」は、当時盛り上がりをみせていたマーラー・ブームの流れを越えて、高い人気を得た。そして2022年、トッド・フィールド監督、ケイト・ブランシェット主演の映画『TAR／ター』でもこの交響曲が用いられて、ふたたび大きく脚光を浴びている。興味深いのは、どちらの映画も、自らの欲望を原因として精神の均衡を崩していく者の物語を綴っていることだ。この作品はマーラーにとって、具体的な標題やテクストに基づかない最初の交響曲であり、ストーリーを持たない純器楽的な音楽であるとされるけれども、そこに積み重ねられる表現や表情、にじみ出る情趣には、聴き手の感情や想像力をひとつの方向に向かって牽引していく力があるのかもしれない。その具体的なあらわれが、これらふたつの映画だったと考えることは、果たして音楽の持つ力の広がりを狭めることになるだろうか。それとも逆に、音楽に対する私たちの想像力を押し広げることになるだろうか。

■ マーラー：交響曲第5番 嬰ハ短調

41歳の夏、新しい別荘にて ►

1883年秋にカッセル王立劇場の次席楽長に就任して以来、指揮者として多忙な生活を送っていたグスタフ・マーラーは、シーズン・オフとなる夏に集中して作曲に取り組むのが常であった。1901年、彼は南オーストリアのマイアーニックに別荘を新築し、夏休暇はそこで過ごすこととなる。この年は同地で「リュッケルトの詩による5つの歌」が書き進められ、「亡き子をしのぶ歌」と交響曲第5番嬰ハ短調にとりかかった。交響曲第5番は翌年夏にマイアーニックで完成し、1904年10月にマーラー自身が指揮するケルン・ギュルツェニヒ管弦楽団によって初演される。その後もいくどかにわたってオーケストレーションに手を入れ、マーラーが死を迎える直前の1911年2月まで改訂は続いた。

対位法を駆使して ►

1905年、アーノルト・シェーンベルクらのサークルに参加したマーラーは、「現代の創造的な音楽家の課題は、バッハの対位法に関するスキルとハイドンやモーツァルトの旋律性を結びつけることだろう」と述べたという。特にマーラーはヨハン・セバスティアン・バッハの音楽に強い関心を持ち、マイアーニックでの休暇時にはゲーテやニーチェなどの愛読書とともにバッハの楽譜を持ち込んで研究していた。交響曲第5番はその成果の最初のあらわれといってよかろう。ここではフーガをはじめとする対位法的な技法が

ふんだんに盛り込まれており、作曲技法においてそれまでの4曲の交響曲と比べて格段の向上が見受けられる。その一方で、それまで交響曲の中核を成す素材であった次作の歌曲の引用は数と重要性を大きく減らした。これは、歌謡的な旋律が高度に発展した対位法的な書法に馴染みがたいためであろう。

交響曲第5番は5楽章からなり、さらに第1、2楽章が第1部、第3楽章が第2部、第4、5楽章が第3部という三部構成をとる。

曲の構成と音楽の特徴

第1楽章　葬送行進曲。トランペット独奏がベートーヴェンの交響曲第5番ハ短調を思わせる音形によるファンファーレを奏して開始される。行進曲らしい主部と緩やかで悲痛なトリオとがともに変奏されつつ進んでいく。終わり近くでは「亡き子をしのぶ歌」の「いま太陽は晴れやかに昇る」が引用されている。

第2楽章　嵐のように激しく動いて。間を置かずに激烈な調子で始まる第2楽章はソナタ形式による。ただし、素材の多くが第1楽章から派生しており、かつ楽章後半で第1楽章が回想されるために、ふたつの楽章をあわせてひとつのソナタ形式と解釈することも可能である。また終結部にあらわれる輝かしい金管のコラールは、第5楽章を予告する。

第3楽章　スケルツォ。通常の交響曲では扱いの軽いスケルツォが、ここではもっとも長大な楽章となった。ワルツ風のリズムが通う民俗舞曲的な性格を持ちつつも、独奏ホルンが協奏曲風の活躍をみせるほか、ふたつのトリオを持ち、第2トリオの後にはソナタ形式の展開部・再現部を思わせる部分が続くなど、そのかたちは大胆に拡張されている。

第4楽章　アダージェット。弦楽合奏とハープのみにより、静謐で陶酔的な音楽が繰り広げられる。曲想の点で「リュッケルト歌曲集」中の「我はこの世に忘れられ」との関連が指摘される。休みなく次の楽章に続く。

第5楽章　ロンド・フィナーレ。ホルンが主要動機を提示した後、ファゴットが歌曲集「子供の不思議な角笛」中の「高い知性への賛美」を引用して開始される。自由なロンド・ソナタ形式で、二重フーガや三重フーガなど、錯綜とした対位法的展開が目をひく。アイロニカルな明るさをはらみつつ、やがて第2楽章末尾に登場したコラールが高々と回想されて、熱狂的な終結になだれ込む。

[楽器編成]フルート4(ピッコロ4持替)、オーボエ3(イングリッシュホルン持替)、クラリネット3(D管、C管、バスクラリネット持替)、ファゴット3(コントラファゴット持替)、ホルン6、トランペット4、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、吊しシンバル、トライアングル、タムタム、ホルツクラッパー、グロッケンシュピール、ハープ、弦楽5部。

発想がうまれ、シェアする場所

シェアラウンジは、ラウンジの居心地と本による提案、オフィスの機能性を兼ね備え、訪れた人に「新しい発想を提供する場所」です。

新たな発想は心を躍らせ、生活を明るくし、世界をほんの少し良い場所にしてくれるもの。働く人だけでなく、お子さまや学生、主婦の方など、すべての人たちが日々の暮らしの中で、発想を必要としています。

ここに集まる多様な人々が風景をつくり、そこにいるだけで刺激がもらえたり、本からインスピレーションを得ることもできる。ある時は居心地の良いカフェやバーとして、またある時は体験を促すイベントスペースとして。

新たな発想を生む、たくさんの仕掛けが詰まった空間です。

SHARE LOUNGE by Culture Convenience Club

[SHARE LOUNGE]

代官山 蔦屋書店／渋谷スクランブルスクエア／下北沢／亀戸ほか、全国に順次拡大中。
最新の店舗一覧はアプリをご覧ください。

TSUTAYA SHARE LOUNGE **SHARE LOUNGE 公式アプリ**

App Store　Google Play

SUMIDA TOBIRA of classic 2023-2024 Season #17

9.29[金] 30[土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会すみだクラシックへの扉 第17回
2023年9月29日(金)14時00分 すみだトリフォニーホール
9月30日(土)14時00分 すみだトリフォニーホール

◉ ラヴェル (1875–1937)
亡き王女のためのパヴァーヌ（管弦楽版）　約5分
Maurice Ravel: Pavane pour une infante défunte

◉ ラヴェル
ピアノ協奏曲 ト長調 ＊　約20分
Maurice Ravel: Piano Concerto in G major ＊

Ⅰ. Allegramente
Ⅱ. Adagio assai
Ⅲ. Presto

―― 休憩20分 ――

◉ チャイコフスキー (1840–93)
交響曲第6番 ロ短調 op. 74「悲愴」　約50分
Pyotr Il'yich Tchaikovsky: Symphony No. 6 in B minor, op. 74, "Pathétique"

Ⅰ. Adagio – Allegro non troppo
Ⅱ. Allegro con grazia
Ⅲ. Allegro molto vivace
Ⅳ. Finale: Adagio lamentoso

[指揮] 阿部加奈子
Kanako Abe, Conductor

[ピアノ] 三浦謙司 ＊
Kenji Miura, Piano ＊

[コンサートマスター] 伝田正秀
Masahide Denda, Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
■共催：すみだトリフォニーホール
■特別協賛：オリックス株式会社／公益財団法人オリックス宮内財団
■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))
独立行政法人日本芸術文化振興会

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

オリックス株式会社
公益財団法人 オリックス宮内財団

文化庁

Profile

©Ryota Funahashi

阿部加奈子［指揮］ Kanako Abe, Conductor

オランダ在住。東京藝術大学音楽学部作曲科を経て、日本人として初めてパリ国立高等音楽院指揮科で学ぶ。パリ国立高等音楽院在学中、現代音楽アンサンブル「ミュルチラテラル」を創設、2014年まで音楽監督を務める。現代音楽演奏に定評があり、これまでに180曲以上の世界初演の指揮を手がける一方で、チューリッヒ歌劇場やモンペリエ国立歌劇場でファビオ・ルイージ、エンリケ・マッツォーラ等のアシスタントを務める。現在、Tokyo Ensemnable Factoryのミュージック・パートナー、フランス・ドーム交響楽団の音楽監督、ハーグに本拠を置くアンサンブル・オロチの創設者兼音楽監督を務める。2022年7月にエクサン・プロヴァンス音楽祭、2023年6月にロイヤル・オペラ・ハウスにそれぞれデビューを果たし、ヨーロッパを中心に活躍の場をさらに広げている。2024年1月には藤原歌劇団のグノー『ファウスト』公演にて、日本でのオペラ・デビューを果たす。

阿部加奈子公式ホームページ：
https://www.kanakoabe.com/jp/

©Harald Hoffmann

三浦謙司［ピアノ］ Kenji Miura, Piano

アルゲリッチが審査員長を務めたロン=ティボー=クレスパン国際コンクール（2019年）にて優勝及び3つの特別賞を獲得、新たな才能としてその名を世界に知られることになる。これまで第4回マンハッタン国際音楽コンクール金賞受賞、第1回Shigeru Kawai国際ピアノコンクール優勝など各賞を受賞。ウィグモアホールはじめ世界の数々の会場に招かれる。
1993年神戸生まれ。4歳から自らピアノを始め、13歳で単独渡英、ロンドン・パーセル・スクールに入学。ロシャン・マガブ及びウィリアム・フォンのもとでピアノを学ぶ。2011年、ロンドン王立音楽アカデミー、ベルリン芸術大学、カーティス音楽院すべて合格、ベルリン芸術大学にてクラウス・ヘルヴィヒ氏に師事、研鑽を積む。12年夏、音楽の世界から一度離れる決意をし、ベルリン芸術大学を中退。日本で様々な仕事をしながらボランティア活動にも参加。14年4月、同じくベルリン ハンス・アイスラー音楽大学に入学、エルダー・ネボルシン氏に師事。ワーナークラシックス・ジャパンより22年11月4日、新アルバム『アイデンティティ』をリリース。

Program Notes ◉小室敬幸［音楽ライター］

実のところモーリス・ラヴェル（1875～1937）は、ピョートル・チャイコフスキー（1840～93）の音楽を評価していなかった（そもそもベートーヴェン的な大仰さを好いていなかったようである）。ところが意外なことに理想とする作曲家は一致しており、それはヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～91）だった。

例えばチャイコフスキーはオペラ『フィガロの結婚』の全曲をピアノ伴奏に編曲（リダクション）するのみならず、なんと台詞を自らロシア語に訳しているほど強い思い入れがあったようだ（最も好きだったのは『ドン・ジョヴァンニ』）。他にも、管弦楽組曲第4番という作品でモーツァルトをドラマティックにアレンジしており、どうやらチャイコフスキーはモーツァルトの生み出すドラマに惹かれていたようだ。

一方、ラヴェルは自ら作編曲した楽曲以外をほとんど指揮していないのだが、数少ない例外がモーツァルトの交響曲第40番だった（1926年2月2日にコペンハーゲンにて）。モーツァルトの簡素さを理想としているラヴェルにとって、チャイコフスキーによるモーツァルト編曲は余計な付け足しでしかなかったであろう。同じ作曲家を愛しながらも、全く異なる音楽を生み出した2人の人物による傑作を、本日はお楽しみいただきたい。

■ ラヴェル：亡き王女のためのパヴァーヌ（管弦楽版）

古典の精神を現代に ►

ラヴェルは13歳年上のクロード・ドビュッシー（1862～1918）と共に、「印象派」の作曲家として紹介されることがあるけれども、それはラヴェルの一面に過ぎない。情景を主観的に描く「水の戯れ」や組曲「鏡」などは印象派になぞらえられるが、ラヴェルは最初期から晩年まで一貫してモーツァルトを理想とする古典主義者であり、古くからある音楽様式を現代的に読み替えて作曲することを生涯にわたって続けた。

成立の経緯と特徴 ►

1899年、まだラヴェルが学生だった時にピアノ曲として生まれ、1910年に作曲家自身によって管弦楽に編み直されたこの曲は、ルネサンス時代の舞曲パヴァーヌを題材にしている。パヴァーヌは北イタリア発祥で16世紀初頭にフランスの宮廷で流行ったダンス。一説によれば語源がクジャク（イタリア語 pavone）であることからも分かるように、踊りといっても非常にゆったりとした行進のような動きだった。なお「亡き王女のための」というタイトルは誰かを追悼しているわけではなく、「古い時代」に思いを馳せているに過ぎない。構成は小ロンド形式（A-B-A'-C-A"）である。

［楽器編成］フルート2、オーボエ、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、ハープ、弦楽5部。

■ ラヴェル：ピアノ協奏曲 ト長調

晩年の不調のなかで ►

「亡き王女のためのパヴァーヌ」が初期作だったのに対し、この協奏曲は1929～31年にかけて作曲された最晩年の作品。このあとには歌曲「ドゥルネシア姫に思いを寄せるドン・キホーテ」（1932～33年）しか完成させていない。伝記をあたってみると1933年の夏から謎の体調不良に悩まされ始め、身体を思うように動かせなくなっていったようだ。病気については諸説あるが、脳に問題が生じたことによる失語症だったのではないかという。

実は体調を崩す前年の10月にタクシーの乗車中、衝突事故に巻き込まれているので、それが遠因になっているのかもしれないと勘ぐりたくなる。だが事故より前に完成しているこの協奏曲に関しても、数ヶ月で完成する見込みだったのに丸1年かかってしまうなど、体調不良の前から問題は起きていたのかもしれない。

古典的な協奏曲を意識 ►

いずれにしても症状が進行していくと、頭の中に音楽は鳴っていても、それを楽譜に書き表すことが出来なくなってしまった。作曲家としてこれほど辛い状況があるだろうか？ 問題を打開すべく、1937年12月17日に開頭手術を試みるが、19日に昏睡状態となってしまい、28日に62歳で亡くなった。ラヴェルにとって実質的な「白鳥の歌」となったこの協奏曲は、モーツァルトとサン=サーンスを規範にした伝統的な急－緩－急による全3楽章で構成されている。

曲の構成と音楽の特徴 ►

ソナタ形式による**第1楽章**は、ラヴェルが当初この曲に「嬉遊曲（ディヴェルティスマン）」と名付けようとしていたように、陽気でにぎやかな第1主題で始まる。ところが第2主題にはブルースやジャズ的なサウンドが取り入れられ、気だるい雰囲気が漂う。

三部形式による**第2楽章**は、長いピアノソロで始まり、伴奏は8分の6拍子、主旋律は3拍子というポリリズムが基調になっている。酸いも甘いも噛み分けたことが伝わってくる本作の白眉だ。

ソナタ形式による**第3楽章**も、嬉遊曲的な性格とブルース的な気だるさを持っているが、今度は急速なテンポで一気呵成に駆け去ってゆく。

［楽器編成］ピアノ独奏、フルート、ピッコロ、オーボエ、イングリッシュホルン、クラリネット、Es管クラリネット、ファゴット2、ホルン2、トランペット、トロンボーン、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、吊しシンバル、トライアングル、タムタム、鞭、ウッドブロック、ハープ、弦楽5部。

■ チャイコフスキー：交響曲第6番 ロ短調 op. 74「悲愴」

死の9日前に初演 ►

当時のロシアの暦であるユリウス暦で1893年10月25日（グレゴリオ暦では11月6日）、チャイコフスキーは53歳で急逝。この悲愴交響曲の初演を指揮した9日後のことだったため自殺説も噂されたが、亡くなる4日前に医者が診断したコレラ菌の感染が死因になったとされている。

明かされなかった物語 ►

初演のコンサートの休憩中にリムスキー=コルサコフが、この交響曲にプログラム（何らかの物語性）があるのかとチャイコフスキーに質問したところ、あるけれども今は語りたくないと返答したという。結局明かされることはなかったため今も真相は謎のままだが、パトロンのメック夫人に対して語った交響曲第4番のプログラムが、自らの置かれた状況を描いたものだったことを鑑みれば、この第6番も近しい内容をもっていた可能性は充分にあるだろう。自らの性的嗜好に悩んできた経験が反映されているのだと主張する説もある。

曲の構成と音楽の特徴 ►

第1楽章は序奏付きのソナタ形式。冒頭でファゴットが地面を這いつくばりながら進んでいくような旋律は、第1主題になるだけでなく、発展的に変奏されて全楽章に行き渡る。弦楽器で歌われる暖かな第2主題とコントラストを生み出し、山あり谷あり地獄あれば天国ありで、まるでジェットコースターのように感情が大きく揺り動かされていく。

第2楽章は三部形式による舞曲。流麗だが5拍子で、ぎこちなく3拍子で踊れないワルツだと捉えれば、社会に適応しているようにみえても、内心では馴染めていない状況を表現しているようにも聴こえる。

第3楽章は軽快なスケルツォだが、表に出てくる要素が変わることで2度にわたり行進曲へ変身。最後はまるでハッピーエンドのように締めくくられる。

第4楽章は自由なソナタ形式。また第1楽章のように暗い第1主題と明るく始まる第2主題が強いコントラストを生み出すが、長調には行き着かず、代わりに死を象徴することの多い「銅鑼」の弱音が鳴り、葬送風のトロンボーンとテューバによるコラールが続いていく。最後は心のよすがだった第2主題が短調で再現され、手の届かないところへと遠ざかってしまう。

［楽器編成］フルート3（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2（バスクラリネット持替）、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、タムタム、弦楽5部。